



2024年
3月20日
No. 169

## 2024年度 東京蜘蛛談話会総会例会

1. 日時 2024年4月29日(休) 10時より(開場9時30分)
2. 場所 東京環境工科専門学校 〒120-0022 東京都墨田区江東橋 3-3-7  
JR 総武線 東京メトロ半蔵門線 錦糸町駅南口から徒歩3分
3. 連絡 当日は、東京環境工科専門学校の電話が使用できないので、緊急時には以下に連絡ください。  
加藤輝代子 090-7012-6458 初芝伸吾 090-6156-8378
4. その他 プロジェクター、PC 等用意いたします。
5. 講演をご希望の方は、演題を事務局初芝までお知らせください。  
〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8 コンフィデンス高垣 105  
有限会社エコシス 初芝伸吾  
mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.jp  
Tel : 042-501-2651 Fax:042-501-2652

●錦糸町駅南口から徒歩3分です。



# 東京蜘蛛談話会例会

2023年12月3日 東京環境工科専門学校にて開催



参加者一同

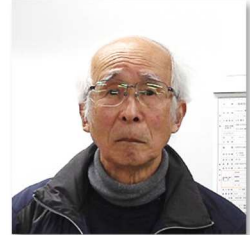
(1) バリアー網の効果

田仲義弘



(2) オオヤドリカニムシを一年間飼育してみた

佐藤英文



(3) タイ王国クモ見遊山の旅 2023A

(4) ハラビロミドリオニグモたちを *Araneus* から分離させる  
谷川明男・ポッパアペチャラッド



(5) イソウロウグモ類の張るホスト網上のネットワーク

(6) 神は細部に宿る

新海 明



(7) 国内に生息する未知のクモ食性クモ類とその捕食行動について

鈴木佑弥



## ハエトリグモ展 第2弾

(2023年9月21日～26日, 下北沢ギャラリースペースプラウト)

仲 條 竜 太

ハエトリグモをテーマに、7名の作家さんの制作した作品を扱う「ハエトリグモ展」が開催されました。主催者の尸（しかばね）さんは、もともと虫の羽をモチーフにしたアクセサリーを制作されていて、アダンソンハエトリとの出逢いをきっかけに、ハエトリグモのぬいぐるみ制作をはじめたそうです。他にも、ステッカーやTシャツ、羊毛フェルトでの作品などが展示・販売されています。どれも種が分かる出来で、ハエトリグモ愛を感じるものばかりでした。次回は2024年春ごろの開催を計画中、さらに今後は、関西方面への展開も画策中とのことです。

今後の開催情報は、X (twitter: @JanpingSpider) でご確認ください。インターネットからは、<https://twitter.com/JanpingSpider> でアクセスできます。



会場の様子 (下北沢ギャラリー  
スペースプラウト)



羊毛フェルトのアオオビハエトリ  
(royal damper さんの作品)

## 多摩だより (9) 広徳寺のムツトゲイセキグモ

新海 明

東京を東西に走る中央線は立川駅で南西へと下る中央線に対して北西に上がる青梅五日市線へと二手に分かれる。青梅五日市線はその先の拝島駅でさらに分岐し、五日市方面へと向かう電車の本数は一気に減少する。その昔、私が初めてこの路線に乗った1960年代には熊川駅近くの多摩川を渡る鉄橋の眼下に広がる河川敷は水田地帯となっていて、春ともなれば一面のレンゲ畑が見られた。秋留野の大地を切り開いて奥多摩の山奥から切り出した石灰岩などを東京へと運び出すための線路だった五日市線は、その頃から次第に住宅開発の波に洗われ始めていた。その頃クモ探しに通ったのは養沢・大岳の鍾乳洞や刈寄山などだった。

それから20年も過ぎた1986年の晩夏のことである。兄から五日市の広徳寺でムツトゲが発見されたとの情報を得たのだ。その頃は、すでにジョロウグモやカラカラ・ナルコ・ヨリメなどの網に関して調べていた時で、ナゲナワの網の作成にとっても興味を抱いていた。また、兄によってムツトゲやマメイタなどのイセキグモ類がナゲナワの一種であることが突き止められていた。私はこの投げ縄網がトリノフンダマシ類の網と同じものではないかと考えていた。オーストラリアに棲息するツノトリノフンダマシの網を調べたクラインさんの報告や米国のナゲナワを調べていたエバーハードさんの論文を入手していたためであった。

日本にいるイセキグモ類も同類の網であるに違いないと睨んでいたが、ナゲナワ（イセキグモ）の網作成など見たこともなかった。そのため、イセキグモが発見されたらぜひともこの目で造網行動を見たいと考えていた。それと同じころにネイチャーシネプロという映像制作会社の吉田嗣郎さんらもナゲナワの生態を映像に収めたいと希望していた。私たちは兄を介して早速連絡を取り合い広徳寺に向かった。私はまだ学校勤めをしていた時だったので、授業が終わるとリュックを背負って夜の広徳寺へと通った。野帳を見直すと一週間に3~4回も通っていた。

ある晩のことだった。ネイチャーシネプロの伊藤浩美さんがすでにビデオカメラをムツトゲに据えていた。聞くと橋糸を行ったり来たりするだけだという。ならば仕方ないので伊藤さんにはビデオをセットしてそのまま見張ってもらい。私は付近にまだ別個体がいなか探してみることにした。しばらくして戻るとムツトゲが2つの粘球をぶら下げている。そして「その映像を撮影することができた」というのである。私は狂喜した。さっそく撮影した映像をその場で再生して見せてもらったのだ。私の興味は粘球の作成過程で、すでに詳しく調べていたトリノフンダマシ類のそれと比較したかったのである。再生された映像は予想通りだった。ムツトゲは橋糸の一端に糸を固定すると粘糸の繰り

出しをしながら橋糸上を前進してしばらく進むと、ここで粘球を膨らし始めた。そして、ある大きさになるとフッと切り離したのだ。そして映像には私の仮説を確信に変えるさらなる様子をはっきりと捉えられていた。それは、1つ目の粘球に引き続き2つ目の粘球作成が写されていたのだ。1つ目の粘球を切り離したムツトゲはその起点のそばまで戻り、少し手前の場所に新たに糸を付着して1つ目と同様な行動で2個目の粘球を作成した。今となっては「それが、どうしたの？」という疑問を抱く方もいようが、その映像を初めて見た私は「思った通りだ」と喜びを抑えきれなかった。

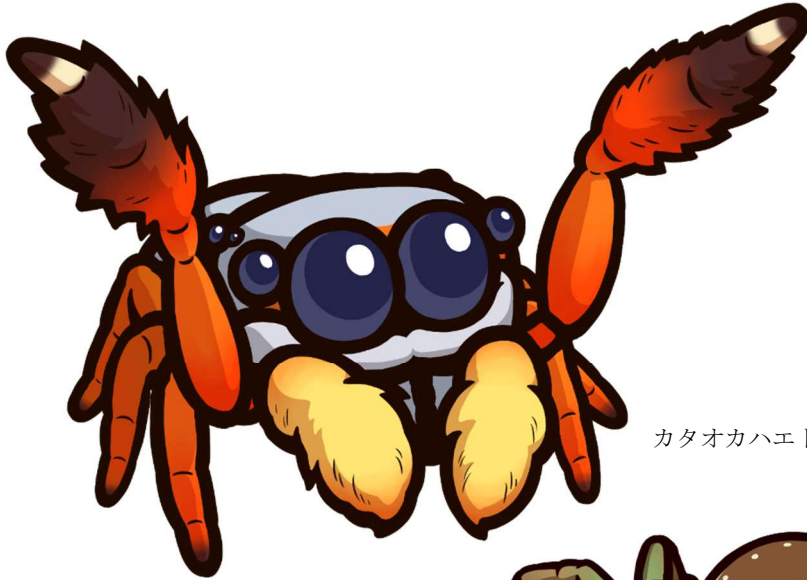
それまでのナゲナワグモ類の分類では1つの粘球しかないもの、2連球を持つもの。果ては6連球を持つクモがいて、いずれも別属にされていたのだ。いったい2連球や6連球の投げ縄はどのように制作されるのだろうか。例えば、1本の糸に粘球を1つずつ2回取り付けたり、6回取り付けたりするのだろうか。1つ1つの粘球の区切りはどのようになされるのか。謎だったのだ。しかし、作成の過程を調べてみれば謎はあっさり解けてしまった。2連球は2回、6連球は6回と1本ずつ別々に、しだいに短くなる粘球が作成されるだけだと分かった。このことは、私には「それだけの話」ととどまらなかった。この発見で「ムツトゲとトリノフンダマシ」が連続した関係にあるクモ（当時でも形態の分類上の観点から支持されていたが）であること、そして、ナゲナワグモ類の「投げ縄」網が「円網」の一種である証拠にもなることが分かったのだ。

映像に映ったムツトゲの行動は、私にはトリフン類のクモがヨコ糸を2本作成しただけに見えたのだ。ただし、ローシア・ジョイントの部分が隣のタテ糸に付着されずに垂れ下がった点が異なっていたのだ。2本のヨコ糸（粘球）を吊り下げたムツトゲは、吊り下げた起点に戻り第2脚で双方の粘球を持ち抱えて「投げ縄」網を完成した。かくして2連球の網ができたのであった。



ゆるグモイラスト

天 木 詩 織



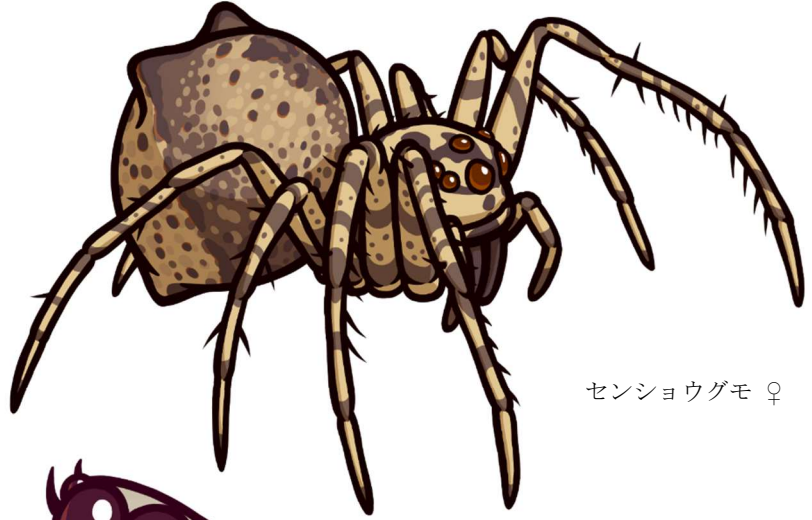
カタオカハエトリ ♂



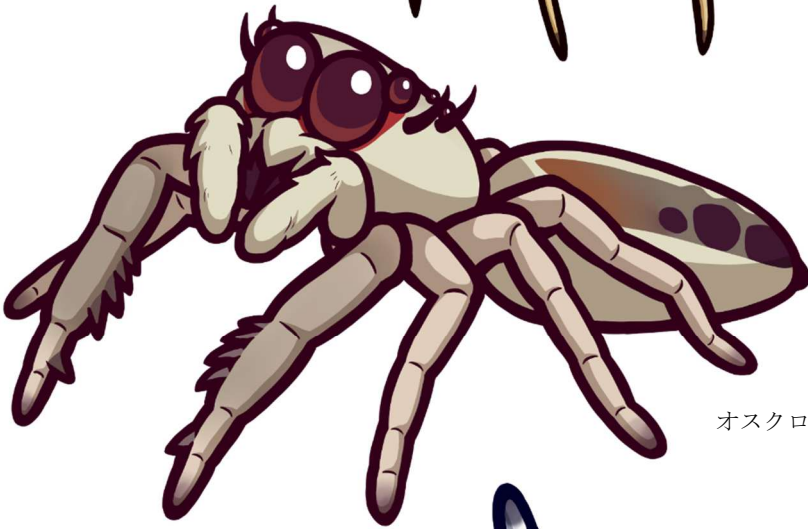
スジブトハシリグモ ♀



アリグモ ♀

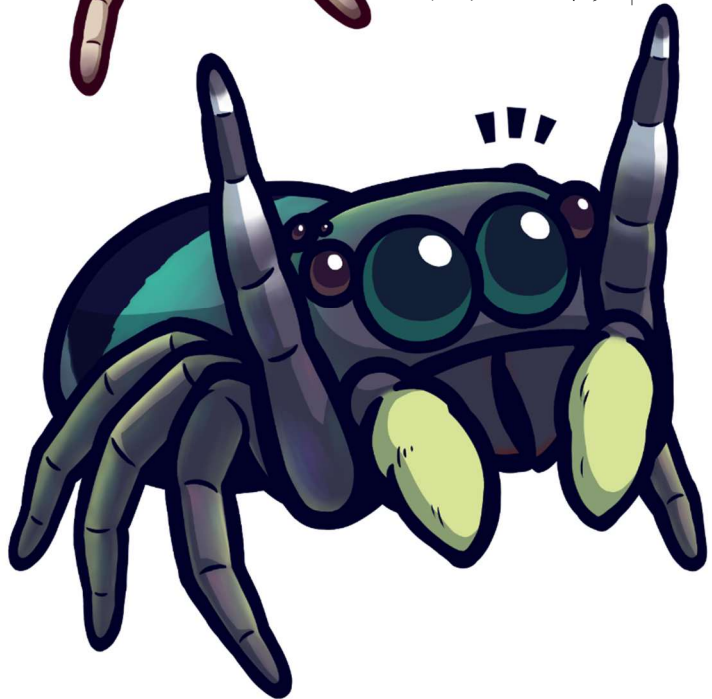


センシヨウグモ ♀



オスクロハエトリ ♀

アオオビハエトリ ♀





マツモトハエトリ ♂

入退会は：

事務局 初芝伸吾 〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8  
コンフィデンス高垣 105 有限会社エコシス  
E-mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

通信原稿投稿先：

谷川明男 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416  
E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

通信の原稿締め切りは、4月末、8月末、12月末です。

KISHIDAIA 原稿投稿先：

鈴木佑弥 〒770-8070 徳島市八万町向寺山（番地なし）徳島県立博物館  
E-mail : sasaganiya1206@gmail.com

キンダイアの原稿締め切りは、6月末、12月末を目安とし、予算枠内のページ数まで先着順といたします。

東京蜘蛛談話会の会費は、一般 4000 円、学生 1000 円です。

**（しばらくの間会費を値下げしておりましたが、2022 年度より元の水準に戻し、一般 4000 円、学生 1000 円といたしました。）**

会費は郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。

会費・住所変更は：会計担当 須黒達巳

〒150-0013 渋谷区恵比寿 2-35-1 慶應義塾幼稚舎

TEL : 080-5683-2765 E-mail: t.s.schlegelii@gmail.com